様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１７４８０

研究課題名（和文）助産学修士課程で修士研究に取り組む成果と課題

研究課題名（英文）Achievements and issues in conducting a research project for thesis of master degree program in midwifery training courses of the graduate schools in Japan

研究代表者
岡山　真理（Okayama, Mari）

奈良県立医科大学・医学部・助教

研究者番号：３０７１１９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、助産学修士課程の修士研究の科目単位数は大学院によって幅があり、取り組む研究内容が異なること、修士論文の審査には助産師課程独自の基準を設けている、または修士論文の審査がない大学院があること、そして修了生の研究遂行能力得点は入学試験倍率、修士論文の審査の有無に関連があることが明らかになった。修士研究に取り組むことで修了生の助産実践能力やキャリアプランにつながっている一方、履修科目の多さ、修士共通科目と助産専門科目のバランスのなかで、大学院生が修士論文に打ち込むためには助産学のカリキュラム編成や教員個人の工夫を必要とされている現状が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本の大学院助産師養成課程における修士研究の実態や、修了生の研究遂行能力に関する現状を明らかにした初めての調査である。質問票調査の回収率の低さやインタビュー調査の参加者獲得の限界はあるものの、当該調査は大学院助産師養成課程で研究指導を担当している全教員を対象にした研究であり、日本の大学院助産師養成課程の修士研究、ひいては助産師教育カリキュラムを検討するうえで基礎資料となり得ると考える。

研究成果の概要（英文）：This project found the credits of the master's thesis in the midwifery training courses of the graduate schools in Japan were different depending on the graduate school. It was found that the research content that graduate students work on was different, that the standards unique to the midwifery course were set in the examination of master's thesis, and that some graduate schools did not have examination of master's thesis. The research performance score of the graduates was related to the entrance examination magnification and the presence or absence of the master's thesis examination.
Working on master's thesis was related the graduates' ability to practice midwifery and developed their career plans. On the other hand, graduate students had to take many courses. Therefore, there were necessary for faculty members to organize the midwifery curriculum, and to devise their own personal ideas.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：助産師教育　修士課程　修士研究　研究遂行能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在、日本国内にある助産師養成機関は、専門学校、大学学士課程、短大専攻科、大学専攻科・別科、大学院と多岐にわたり、養成期間は大学院が 2 年課程である以外は、1 年課程あるいは大学学士課程 4 年間のなかで専門科目を履修し、助産師国家試験の受験資格を得ることができる。近年、日本国内では大学院修士課程に助産師教育を設置する大学が増加し、2020 年現在 43 校（助産師養成機関全 221 校）ある。

大学院修士課程の助産師教育では、助産師活動に必要なコアとなる知識・技術の修得と、高度な専門職業人に必要な深い学識、国際活動に必要な能力、専門的な学問領域の質を上げていく能力を修得する(北川、2013)。他方で、大学院助産師課程では修士課程修了に必要な単位数は合計で 58 単位以上であるため、助産師課程と修士課程の科目履修のバランスとともに、それらの質の担保が課題であるともいわれている(北川、2013；南部、2021)。大学院の助産師課程における修士研究の実態ならびに修了生の研究遂行能力については、他分野の修士課程や修士研究の実態が明らかにされていないことと同様に、明らかにされる機会なく現在に至っている。

２．研究の目的

大学院の助産師課程における修士研究および修了生の研究遂行能力の現状と課題を明らかにすることを目的とした。なお、本研究における修士研究とは、修士論文や課題研究成果物等、修士号を取得するための研究とした。

３．研究の方法

(１)全国横断調査（研究 1）

①研究対象者と調査期間

助産師教育課程を設置している全国の大学院のうち、完成年度を経過した全 32 校(調査時点)に所属し、助産師教育課程の修士研究指導を担当している旨がホームページに記載されている教員と、ホームページに修士研究指導担当の記載のない大学院の助産学教員全員、合計 131 名を対象とした。調査期間は 2017 年 9 月～2018 年 1 月であった。

②調査内容

質問票の設問は、(1)助産学修士課程設置年月日、(2)助産学修士課程 1 学年の学生定員数、(3)過去 3 年間の入試志願者数、(4)規定履修単位数の下限（修士課程、助産専門科目それぞれ）、(5)修士研究の設定単位数、(6)過去の学生の修士研究の社会発信（学会発表、論文投稿、著書、その他の業績の件数）、(7)大学院生の修了時の研究遂行能力 10 項目(研究者自作)、(8)助産学修士課程の課題に関する自由記載とした。

③分析方法

研究遂行能力得点の差の検定には対応のない t 検定を行い、研究遂行能力得点と修士研究単位や比重、および社会発信等の成果との関連は pearson の積率相関係数を求めた。

(２)質的調査（研究 2）

①研究対象者と調査時期

質問票配布の際に同封したインタビュー調査への協力意向を示す葉書により、質問票とは別に返信があり、後日文書での説明にて研究協力の同意が得られた助産学教員 7 名を対象とした。調査期間は 2018 年 6 月～2018 年 8 月であった。

②データ収集および分析方法

インタビューは半構造化面接で行った。インタビューの項目は、修士課程共通科目（修士研究を含む）と助産学専門科目を並行して行ううえでの課題と課題解決のために行っている工夫、修了生の研究遂行能力と助産実践力についてとした。インタビュー前には対象者や所属している大学院の属性、大学院 2 年間のスケジュール概要について質問紙にて聴取した。データの分析には Flick のテーマ的コード化を用い、各大学院における特徴の類似性と相違性を検討することで、大学院修士課程の助産師教育に関する現状と課題を捉えた。

４．研究成果

(１)結果（研究 1）

①対象者の概要と大学院の属性

調査票を配布した助産学教員 131 名のうち、返信があったのは 48 名であった(回収率 36.1%)。そのうち修士研究を担当していないと回答した 13 名と研究指導した修了生がいないと回答した 5 名の計 18 部を除き、有効回答 30 部を分析対象とした（有効回答率 62.5%）。対象者の概要と大学院の属性を表 1 に示す。大学院によって、1 学年の定員や修士研究の単位数に幅があり、倫理審査や論文の審査の有無、あるいは助産コース独自の審査の基準を設ける大学院があることがわかった。

表 1. 対象者の概要と大学院の属性 n=30（研究 1）

			n (%)	Median	SD
個人の属性					
	職位	教授	16 (53.3)		
		准教授	9 (30.0)		
		講師	2 (6.7)		
		助教	3 (10.0)		
所属の大学院の属性					
	大学院設置からの経過年数（調査時点）			5.0	±3.0
		満4年以下	9 (30.0)		
		満5年以上8年以下	13 (43.3)		
		満9年以上	4 (13.3)		
		無回答	4 (13.3)		
	1学年の定員数			6.0	±8.0
		9名以下	18 (60.0)		
		10名以上19名以下	5 (16.7)		
		20名以上	4 (13.3)		
		無回答	3 (10.0)		
	過去3年の入試平均倍率			1.4	±0.8
	（過去3年の受験者数から算出）	1.0未満	7 (23.3)		
		1.0～2.0未満	12 (40.0)		
		2.0～3.0未満	6 (20.0)		
		3.0以上	2 (6.7)		
		無回答	3 (10.0)		
	修士研究の履修単位数	0単位	2 (6.7)		
		1～3単位	6 (20.0)		
		4単位	4 (13.3)		
		6単位	3 (10.0)		
		8単位	4 (13.3)		
		10単位以上	5 (16.7)		
		無回答	6 (20.0)		
	修士研究の倫理審査	有	26 (86.7)		
		無	3 (10.0)		
		無回答	1 (3.3)		
	修士論文の審査	有	27 (90.0)		
		無	2 (6.7)		
		無回答	1 (3.3)		
	修士論文審査における助産コース独自の基準	有	10 (33.3)		
		無	19 (63.3)		
		無回答	1 (3.3)		

表 2. 修了生の研究遂行能力得点と関連要因（n=30,有効回答により変動）

		n	mean	SD	r	p	
大学院設置からの経過年数					-0.27	0.22	
1学年の定員数					-0.32	0.14	
過去3年の入試平均倍率					**0.56**	**<0.01**	b
修士研究単位数					<-0.01	0.97	
修士研究の公表の程度[a]					-0.12	0.58	
修士研究の倫理審査	有	24	34.2	±5.1		0.65	
	無	1	24.0				
修士論文の審査	有	23	34.6	±4.9		**<0.01**	
	無	2	24.5	±0.7			c
修士論文審査における助産コース独自の基準	有	9	34.2	±6.2		0.76	
	無	16	33.5	±5.1			
修士研究の論文投稿	有	10	33.8	±4.4		0.99	
	無	13	33.9	±6.6			

a：(学会発表数＋論文投稿数)/修了生数, b：pearson積率相関, c：対応のないt検定

②修士課程修了生の研究遂行能力に関連する要因

研究遂行能力 10 項目の妥当性と信頼性を確認したのち分析を行った(Kaiser Meyer Olkin 標本妥当性測度 0.84。因子分析：主因子法ﾌﾟﾛﾏｯｸｽ回転、2 因子解、10 項目全て因子負荷量 5.0 以上。Cronbach 's α係数は第 1 因子α＝0.92、第 2 因子α＝0.90、2 因子 10 項目の説明力 70.4)。助産学修士課程修了生の研究遂行能力に関する 10 項目(各 5 点、50 点満点)の合計得点の平均値は 33.6 点（SD 5.4）であり、最小値 24 点、最大値 46 点であった。修了生の研究遂行能力得点と関連要因は表 2 のとおりである。

(２)結果（研究 2）

①研究参加者の概要

研究参加者は 7 名（7 大学院）であった。役職は教授 4 名、准教授 1 名、講師 1 名、助教 1 名で、所属する大学院は国立大学 4 校、私立大学 3 校であった。7 名中 6 名は大学院以外の助産師養成課程での教育経験があった。インタビューの所要時間は平均 84.3 分であった。

②修了生の研究遂行能力と研究遂行能力に関係する要因

７名のインタビュー内容から抽出された修了生の研究遂行能力と、修士論文に取り組む環境と修士論文に取り組むことで生じる影響について表 3 に示す。4 つの大カテゴリー【修了生の研究遂行能力】【修了生の研究遂行能力に関係する要因と助産学専門科目・助産実践能力との関係性】【大学院助産師養成課程を取り巻く環境】【修了生の 2 次成果(助産師国試受験資格と修士号に加えて獲得されるもの)】に分類された。文中の【　】は大カテゴリー、＜＞は中カテゴリーを示す。

表 3.　修了生の研究遂行能力と修士論文に取り組む環境と影響

【1　修了生の研究遂行能力】
- ＜1－1　経験する研究プロセスが浅い＞
- ＜1－2　一通りの研究プロセスは身についている＞
- ＜1－3　修士論文は助産学以外の修士課程修了生に劣らない＞
- ＜1－4　研究規模が縮小しがち＞
- ＜1－5　助産学以外の修士課程修了生と同等とはいえない＞

【2　修了生の研究遂行能力に関係する要因と助産学専門科目･助産実践能力との関係性】
- ＜2－1　取り組んだ研究内容＞
  - 2-1-1　助産学以外の修士課程と同等の研究
  - 2-1-2　審査基準を緩和した研究
  - 2-1-3　事例検討
  - 2-1-4　文献検討
- ＜2－2　履修科目の多さ＞
  - 2-2-1　科目数が多く時間割が長時間になる
  - 2-2-2　実習や助産専門科目の内容が充実する
- ＜2－3　修士共通科目と助産学専門科目の比重と相互への影響＞
  - 2-3-1　実習が研究遂行の糧になる
  - 2-3-2　実習期間に研究は進まない
  - 2-3-3　研究プロセスを深める時間が取れない
  - 2-3-4　模索しながら助産カリキュラムを改訂している
  - 2-3-5　修士共通科目や研究との兼ね合いで効果的に実習が組めない
  - 2-3-6　修士課程の履修科目に選択の余地がない
  - 2-3-7　実習が流動的で修士共通科目との調整が必要
- ＜2－4　修士論文に打ち込むためのカリキュラムと教員の工夫＞
  - 2-4-1　助産カリキュラムを詰めて研究に専念する期間を確保する
  - 2-4-2　実習を挟み1年後期にも修士共通科目を受けることで研究着想に活きる
  - 2-4-3　分娩介助実習は2年次に行い、1年次は講義と研究に専念する
  - 2-4-4　時間割に空きコマをつくり余裕をもたせる
  - 2-4-5　長時間履修にならない様一日の授業時間を規定する
  - 2-4-6　修士共通科目の開講日時を固定しない
  - 2-4-7　学部時代の卒業研究を発表し学会参加の機会をつくる
  - 2-4-8　ゼミで英文抄読会を行う
  - 2-4-9　他学生に刺激を受ける機会を増やすためインフォーマルな抄読会を行う
- ＜2－5　修了生の助産実践能力＞
  - 2-5-1　研究期間による就職までの実践ブランクは実践力に影響ない
  - 2-5-2　就職先から修了生の高評価を得る
  - 2-5-3　実習間や就職前に生じる実践ブランクにより実践力が後退する
  - 2-5-4　ケアのエビデンスを調べる姿勢が身につく
  - 2-5-5　修了生が自身の助産実践力に自信をもつ

【3　大学院助産師養成課程を取り巻く環境】
- ＜3－1　大学院生の学習基礎力＞
  - 3-1-1　ｽﾄﾚｰﾄ進学者のつまづき
  - 3-1-2　学生定員と入学志望者数
  - 3-1-3　学生によって学習基礎力に差がある
  - 3-1-4　臨床経験者のアドバンテージ
- ＜3－2　志望動機と修士論文に取り組む意欲＞
  - 3-2-1　大学院や助産師課程への進学が選択肢の一つに過ぎない
  - 3-2-2　あえて2年課程の助産師課程を選択する意識の高さ
  - 3-2-3　キャリア形成を見据えた修士課程進学
- ＜3－3　2学年の協同＞
  - 3-3-1　2年生を見本にする
  - 3-3-2　2学年が連携する
- ＜3－4　研究指導教員の指導力＞
  - 3-4-1　実習指導や学部教育も兼任している
  - 3-4-2　修士講義や研究指導に専念できている

【4　修了生の2次成果（助産師受験資格と修士号に加えて獲得されること）】
- ＜4－1　キャリアプランの発展＞
  - 4-1-1　博士課程が見通せる
  - 4-1-2　修士論文を投稿･学会発表する
  - 4-1-3　就職先で看護研究を主導する
  - 4-1-4　修士課程修了後のｷｬﾘｱ形成が意識できる
- ＜4－2　社会性と助産師アイデンティティの発達＞
  - 4-2-1　調査や実習で培われる接遇と主体性
  - 4-2-2　2年かけて育まれる助産師アイデンティティ
  - 4-2-3　TA（Teaching Assistant）の経験が後輩育成の意識を育てる

○(数字1桁)：大カテゴリー

○-○：中カテゴリー

○-○-○：小カテゴリーを表す

さらに、カテゴリー間の関係性を分析し、修了生の研究遂行能力および修士論文に取り組む環境と影響の構造が明らかになった（図 1)。【修了生の研究遂行能力】は【大学院助産師養成課程を取り巻く環境】の中で、<履修科目の多さ><修士共通科目と助産学専門科目の比重と相互への影響><修士論文に打ち込むためのカリキュラムと教員の工夫>に関係し、<取り組んだ研究内容>の影響をうけていた。修士論文に取り組むことで<修了生の助産実践能力>に影響し、<キャリアプランの発展><社会性と助産師アイデンティティの発達>につながっていた。

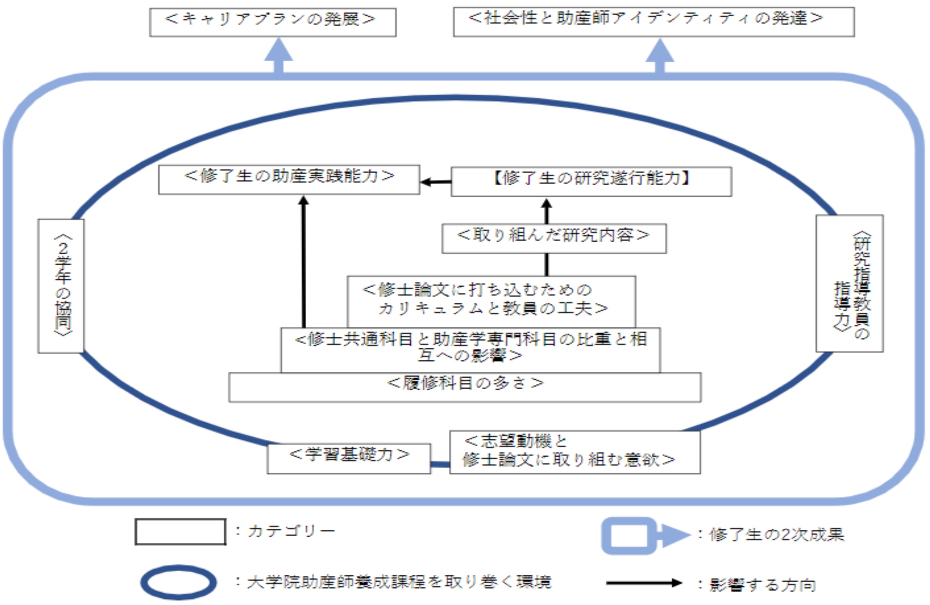

図 1. 修了生の研究遂行能力および修士研究に取り組む環境と影響の構造図

(3)考察（研究 1 および研究 2 の統合）

①助産学修士課程における修士研究および修了生の研究遂行能力の現状

大学院によって研究単位が異なっており、修了生の研究遂行能力得点と入学試験倍率、および修士論文の審査の有無に関連があること(研究 1)、大学院によって取り組んでいる研究内容が異なっており、それにより修了生の研究遂行能力に差が生じている可能性が明らかになった(研究 2)。修了生の研究遂行能力には大学院助産師養成課程を取り巻く環境のなかで、履修科目の多さ、修士共通科目と助産学専門科目の比重と相互への影響、修士論文に打ち込むためのカリキュラムと教員の工夫、取り組んだ研究内容が関係していた。加えて、修士論文に取り組むことで修了生の助産実践能力に影響し、キャリアプランの発展、社会性と助産師アイデンティティの発達へとつながっていた。

②助産学修士課程における修士研究および修了生の研究遂行能力の課題

入学者に積極的な志望動機がある場合、入学後の研究遂行のモチベーション、ひいては研究遂行能力の向上につながっていることが示唆された一方、大学院や助産師養成課程への進学が選択肢の一つに過ぎないという、志望動機が消極的な場合があることが明らかになった。本研究で、修了生の研究遂行能力と入学試験倍率が関連していること、消極的な志望動機が修了生の研究遂行能力に差を生じる要因になることが示唆されたことは、看護学分野に限らず、大学院の入学生定員の確保を優先することによる学生の学習基礎力の低下と勉学や将来に対する意識の低さが指摘した先行文献(久保田・佐藤、2007)を支持している。また、履修科目の多さ、修士共通科目と助産専門科目のバランスのなかで、大学院生が修士論文に打ち込むためには助産学のカリキュラム編成や教員個人の工夫を必要とされている現状と、研究指導教員の指導力を確保するための教員のマンパワーの拡大は、助産学修士課程の課題であると考えられた。

今後は、本研究課題では指導教員による他者評価にとどまった修了生の研究遂行能力について、修了生の自己評価による現状を明らかにする必要がある。

<引用文献>

北川眞理子(2013). 大学院での助産師教育の意義. 看護教育, 54(11), 1003-1009.
南部直気(2021). わが国の看護系大学院に関する研究：看護教育の高学歴化と看護系大学院の増加要因から. 総合人間科学研究, 1, 116-130.
久保田裕二,佐藤勲(2007).「大学院教育に関するアンケート(その 2)」結果報告～大学院教育に対する教員の意識～. 日本機械学会誌, 110(1058), 67-71.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 岡山真理、五十嵐稔子
２．発表標題 大学院助産師教育の修士研究に関する実態調査
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関